



誹諧温故集





温故集

乾



序



ことふふと矢みさうりふ笑せんといはるる衆  
 心んを實とて多し凡そあはしりて  
 心ち一向にわらわらあうりて  
 あはれしやうよと世の好士のあはれ  
 此身もいふは行ふてとあはれあはれと  
 那しやうとあはれあはれとあはれいりて  
 る後と何うする世の中へも後あはれ  
 けしんやとあはれあはれとあはれあはれ



かりけり花大るあはれに  
兼哉忠好もあはれに  
とて忠望もあはれに  
お母いよあはれに

園田忠俊 忠武

序

俳諧八面白さあるは興よき  
いひ出一人よよろこばし  
いふことおほくは代々の声とは  
あはれといふ色紙やあはれに  
俳諧ともそよのわいさめなり  
あはれといふ詞のよきはけり  
俗言と嫌いと作せる句といふと  
いふやふれともそよの作法と



なりしうおよは花雪年月八うおやう此を  
未凍の人ハ雪月花に雪の句種と風流  
よき音のやうよあうくくくやーやん  
句との好む軍ハきく和音連音として  
いやーと誹諧ハくくはるるうよそ作  
ゆやふれくの人ハ忌絶不留のふあふん  
九けりよそーて天下よあそはる人  
すゝ宗鑑を武等う歌のー句種ハ雪  
もき音めは又和音の風情とくくは  
和音と用ひは云々のよらーととんそ  
て誹諧の連音とりあふく月の月と立  
すてといふハき音よかき音うおほ  
といたし君う代のひくくくはひのあふ  
和音もき音も誹諧もいくくからる  
有へくはかきくはは此月ハ名前の習  
てはきりよあくく未代ハ其は和音  
よりも廣しいふといふなれハとて  
歌ふるうとくくくすなれハとて







めいふんといふもあまういふことのもていふ  
きうしてじういふことのもていふ  
はらういふことすきい人のいふ  
ういふこといふこといふこといふこと  
の人といふこといふこといふこと  
いふこといふこと

逍遙軒 貞徳述

目録



- 一 ついへの公家元武友方の浄名句
- 一 名ある釋門の人の名句
- 一 首の連句所あるは其職は秀、産の古人の名  
中身は武宗證の世は名ある古  
句の
- 一 の名句の
- 一 源頼光の長より言はぬ軍とこの同の  
といふこと古人の句と合せて作る
- 一 抱名北山辞 名室  
辭の故辞 宗因



虱の辨 虱考

歌月辨 立圃

金<sup>た</sup>芭蕉房辨 素堂

新<sup>た</sup>政考 其角

嵐乃<sup>た</sup>行の辨 其角

五倫の句 其角 沾酒

對<sup>た</sup>園女辨 細齋

素々時貞<sup>た</sup>依<sup>た</sup>歌と<sup>た</sup>以て<sup>た</sup>鍾の句二十章と

作<sup>た</sup>又息<sup>た</sup>取<sup>た</sup>よ<sup>た</sup>て<sup>た</sup>秀<sup>た</sup>逸の句と<sup>た</sup>白<sup>た</sup>う<sup>た</sup>ひ<sup>た</sup>く<sup>た</sup>れと

才<sup>た</sup>中<sup>た</sup>——て<sup>た</sup>秀<sup>た</sup>仙と<sup>た</sup>作<sup>た</sup>る

誹諧温故集之上

東武 雷風菴蓮谷選

四序混雜



權中納言定家卿

お花と遊<sup>た</sup>り<sup>た</sup>て<sup>た</sup>り<sup>た</sup>風<sup>た</sup>角

大納言為世卿

糸<sup>た</sup>乃<sup>た</sup>々<sup>た</sup>ら<sup>た</sup>む<sup>た</sup>の<sup>た</sup>絶<sup>た</sup>より<sup>た</sup>従<sup>た</sup>ひ<sup>た</sup>ぬ ホコロ







八幡太郎源義家

乱を平<sup>モ</sup>癒ハる力もすそを似<sup>ル</sup>り

文治五年の秋恭愍と征伐の時

右大将源頼朝卿

新朝りし人の軍より名を九川

より我々等のとれり親の敵と稱す

とありれとありし由り

畠山庄司重忠

友山やあゆみ志けりとのふりハ

本閣 秀吉公

栗田うち瀬川うすうらさか

細川玄旨法印

きこけりめきの敵とのめり

小堀氏 宗甫

あよと物産やまの先倫

子早破城合戦の時

長崎九郎左衛門師宗

りさかけてかつとえせよ山樗



秀吉公の鮮浄陣の時

深水三河守入道宗甫

わらわらハ松て其すきらく那

寅永五子盛法院より

細川玄旨法印

浮せう那あつけの子れせの

同

よーや隆し麦ハ何くとももの

羅山子林道春

きつて後へとのぬよよと具是併

慶安と改えありしと

半井ト粮法眼

改とりの安又安穩の天下の如

旧年五万石とありて

西岸寺仕口上人

ほららやゑその後よ五万石

徳助のよりききまの

山とらふふて



鴨長明法師

うゝの山をともて死ぬつゝと云ふ歌

紫野一休和尚

月よつ月や卯月八日花をく

深草元政上人

梅の花は白くやしらさうの春

東海寺沢菴和尚

さむねとむらさきとや陶る序

紫野一休和尚

菅原の初れ翁よ燈乃月

松花堂 昭乗

緊のるふれ之上や 南 禅寺

高野山楚仙上人

いさのをるあけて配るやかき袋

祇園 妙く

紫野一休和尚

くさくさの耳味よまのり

愚道 和尚



大ぬくの葉はあつらふや梅子

西岸寺住口上人

と薄誰少あつれて炭俵

同

正三位長官常和

よ水と波や岩井の底心

宗祇法師

冬ハ折糸白の雪して物糸

心敬僧都

九ツの品川あるに蓮の那

雨乞の吟

牡丹花肖栢

えいしーるやぶのやのぬるえ

宗長法師

梅の香よせららぬて梅ぬおれ

櫻井元佐

春のよき舞よみしーる堂のな



宗粮法師

雲の袖あはしては一の天の川

救済法師

よみ和布藤やけのつまこめ出雲酒若

くまの都乃よんぬいと

千利休

雪も雪もくし上よくらのの

里村法橋紹巴

梅の花あはくくすもむか

狩野常信

まはあけり名も古ありし厨ヶ盤

瀬戸藤四郎春慶

淋しこの友まよなる火桶か

老の身のら

千利休

春の橋

まらりれき路巾とゆるせ津を月

そらり新左衛門

祇園金や論義やちく川の山



む芥子のサキ常すしむるクニヲ部

春の部

歳旦

元日や神代のももしあていし  
 守武  
 元日のあたるものよやし不二の山  
 泉鑑  
 鳳凰も出まのしとくささうの年  
 貞徳  
 去永とりみやまはらのわさう  
 立圃

我も武う春よし来るやと朝の去  
 貞室  
 去のしりしりやーまきうさうの去  
 望一  
 元日やあてふらうもまきニ  
 重頼  
 耕クワマスとそ春の種まきく試すもか  
 西武  
 初まやあり餘るはく金糸花  
 令徳  
 万歳や春あしうもも徳のう  
 梅盛  
 面白やし神も眠くや日のほめ  
 安静  
 折初る基の一日やと朝の去  
 徳元  
 あうあて天下のそや春の今  
 玄札



とれいこやまの四代とこまき雲 季吟  
新雪のりま又そちとこまきふのふ 宗因  
葉子やりし香くむるちの春 未得

雞旦

元日は田毎の日こそこのきれ 芭蕉  
深刷毛走くはよむさく山折後 調和  
まよひぬ葉もふるや祢のま 幽山  
うらぬやふ牧分洞玉のま 不ト  
門松や野原あくくも 老う春 舉白

正並よしれかりうてと節の春 休甫  
我意の松崎もけりくく川 西鶴  
元日やこれき神川のまれま 来山  
餅のくまよりかき集りぬ鏡草 山夕  
鐘ひしう賣ぬ目もくく江原のま 其角  
元節や酔て雀のおくく 嵐雪  
蓬葉名の林葉よぬくふ荒の那 鬼貫  
神日うねりかきやくわく山 一晶  
萩の葉の二三葉そんたり 傍竹 無倫



初をや 船の音もりの真 物 露言  
あふる玉もうましく 君も去 神叔  
鏡とて 餅も彩あり 玉の去 似船  
神をや 誰すり 是も鞠の音 介我  
元日の音や 海本れ 立たり 沾德

一歳の去と定ひて

兼好ハ 死ねしつゝ 春 支考  
長ねの 親の音も 野坡  
撥屋より 沾洲

伏保姫や 赤子の 音も 青峨  
さ水や 六月も 貞佐  
り灯よ 赤子の 音も 百里  
元日や かいこの 音も 琴風  
自遣の 音も 武皇帝 音も 専吟  
芝浦や 車の音も 神も 超波  
音も 音も 音も 松の 音も 珪琳  
音も 水や 老と 音も 乙由







をよよ園とくひやむいぬのむ 其角  
梅干とんちてあふう梅のむ 嵐雪  
籟焼とらりあくしやむいぬ花 秀和  
あゝ雲とくあふう梅のむ 竹亭  
鼻毛よ八麻てもさる梅のむ 貞佐  
梅とくや二と人ばれの過 沾洲  
梅咲やよのあうて肩車 珪琳  
氣のくくぬ入おめて梅足る 園女  
梅くやあのもさる梅のむ 蓮谷

二日月や梅よちさそ仲名<sup>古</sup>山夕

栞

投入とくちく向くも柳の那 春澄  
舟よけ一風と笑さる柳の那 不卜  
入おの姿とんちやさるあさる<sup>古</sup> 調和  
あひ出てぬらうく一を柳のむ 才磨  
春の海よと仮名よさる柳のむ 乙由  
海あけのさうりくとさる柳のむ 貞佐  
三うはとゆいさうらあさる柳のむ 助叟



淀のぬる声となりし柳の音 昔峨  
木兔の眼り流るる柳 一那 琴風  
まぶらうこく馬のあめの柳うる 立隠  
春帯とぬきむうて柳の音 一漁  
八九百えてるやうやあさうな 芭蕉  
ま柳よふ柳あはれとて早し 珪琳  
下くのふるるとのよせぬ柳うる 成屋  
花のちりりとちるる柳可ぬ 蓮谷  
ま柳や二筋とす 老あうり 柳居

鶯

鶯や玉栖の翁乃節のき子 貞室  
鶯や附木はよ出る叡の内 浜徳  
うらひすや山の春柳の逢初日 貞依  
鶯や谷のしむとくいせの連 浜剛  
うらひ春の富士とつらあけて初ら 蓮谷  
鶯のまよとけうさまよし初ら 貞角

野老

ゆて飛さかりのさうりの折交 貞依



むとふと人よハハんせぬ物さし船 蓮若

淑諧の姿ハつろくしてこそ人

の面のごとく一翳無し似あつて人の

句とく一翳(う)や丸きとのあれハ

角なることあつて一翳あつてのふ知

たぐ柳の蟬煩なること又むら

串材の耳いよ昔い物さしうむ 陸珠

まがとと題と

皮むいてアられハもやく物先ハ 餅爰

初午

くは午やまの彩さむ素浪人 沾酒

初むまやいせうアさくはけ天鳥 貞代

はつまや狸り一まハ降てある 白雲

初午やカ彩鳥の物ま森あるは 起波

まらまや掛もまら 伸乃虹 沾洲

乙鳥

はささくや何と忘れて中より 乙由

乙さや後路の波と時を喰 貞代



立降とつらつり割て蕨うね  
世の中は横幅をくぬてふ  
折居

猫画

出て二日人なすいよ猫の虫  
猫の意福つともさす衣う  
琴風  
短尺の教も入や猫の意  
洒堂

彼岸

精をすくまといふよ親の彼岸が  
来山  
はくくつてつとよは陀の彼岸なる  
支考

杖ついで種をすくひんふ  
蓮谷  
揺るとあはれて海を彼岸なる  
沼波

苗代

苗代もゆきありや海をの首  
才磨  
ありうや世よののさな月  
言四  
奈は海や比々案山子のら始  
蓮岳  
苗代やらの一おの風はらし  
又真

椿

山川へ幾世もとるふ松う那  
素堂



徳金ハ清ツクハ梅ノ花ニシテ  
神鳴トモタメトシテ  
猪ノ切トモシテ  
名ノモタメテ  
光  
欠代  
蓮谷  
挑隙

蝶

着花枝ノ  
以約ノ  
蝶ノ  
白  
蓮谷

而  
欠代

蛙

宗鑑  
キ角  
玉蛾  
鎌倉一覽亭記  
雷  
蓮谷述

錦屏山  
頂上  
亭  
左



のおねまゝのしとてや祖佛もはたさる  
 風雅よまのしとて心及しとての院なる  
 とまゝのしとて今ハ其亭とておのおの  
 岸ありとて小礎イシツエけりり名のしとて  
 ちかよとて其世の面影とてしとて  
 けハ松よ月照てりつあけとて登りしとて  
 ありねまゝのしとてまゝの面白く月よ  
 郭よまゝのしとてしとてのまけまよ心とて  
 けりて何の風情とてしとて  
 けりてのしとてまゝのしとて  
 まゝのしとてねがひとて誰け風と  
 とあまのしとて  
 山とてりてあまのしとて  
 蓮谷

上京吟

井筒のしとて都えりしとて蓮谷  
 ちかよのしとて心及しとて宗瑞  
 愛宕のしとてまゝのしとて蓮谷  
 ちかよのしとて心及しとて馬光



鯉二十章

神祇

及栲よしひぬのほろる榼うぬ 貞佐

尺教

栲よ一唱てま向る榼うぬ 同

意

而これを目てうけあす榼か 同

サキ常

多勢の榼はけ比のかうが 同

武士

弊切けとあらしハ濁る榼子 同

農人

小田榼湫のむうりとのこれきり 同

職人

傘法のはり合ふる榼うぬ 同

町人

舟うくおぬよちうさ榼うぬ 同

喜



雨煙をよもき屋の椽下 同

怒

きこりて吹矢よ返るふつ 同

哀

あよのけよ浮橋沢の煙可由 同

樂

ふよよむきあて天きく煙の邪 同

生

山城へ出わりて居る煙うら 同

死

草葉小なりあも知くぬ煙か 同

昼

あごとあす砂よほくこ煙る 同

夜

長明のめるあはいうよ苗かいつ 同

晴天

日和しやよさうりよそへみなく煙 同

雨天



清きく切つて而る極うか 同

會者

人かれようつり山色や連極 同

定離

圓言て内和よそく極る 同

土筆

宗論やそくさのむとほくし 東潮

誓古矢のえよ女やつくし 泊洲

安そくくそつそくつとそ 貞佐

武藏神や人ひとり基て云 古 朝叟

離

奥のひのぬいせぬくろく入が 貞佐

着二下の中ぬくろく離が 超波

僕くくひ天和もゆし 蓮谷

くり言と離もあられめ 其角

波離やぬくろく出て 白雲

夕于

帯はぬくろく川も流れて 沾徳

ニラケルト云字



親<sup>ニ</sup>ツ<sup>シ</sup>心<sup>ニ</sup>平<sup>ク</sup>目<sup>ヲ</sup>と<sup>テ</sup>終<sup>ル</sup>て<sup>ハ</sup>夕<sup>ニ</sup>于<sup>ル</sup>る 其<sup>ノ</sup>角  
夕<sup>ニ</sup>于<sup>ル</sup>るや<sup>ハ</sup>燈<sup>ノ</sup>る<sup>ト</sup>の<sup>ハ</sup>不<sup>ニ</sup>才<sup>ナ</sup>  
り<sup>テ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>感<sup>ヲ</sup>め<sup>テ</sup>す<sup>ル</sup>夕<sup>ニ</sup>于<sup>ル</sup>る 宗<sup>瑞</sup>

### 寒食

多<sup>ク</sup>食<sup>ハ</sup>ら<sup>ズ</sup>や<sup>ハ</sup>物<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>火<sup>ト</sup>と<sup>テ</sup>焚<sup>キ</sup>初<sup>メ</sup>  
多<sup>ク</sup>食<sup>ハ</sup>ら<sup>ズ</sup>や<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>よ<sup>リ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>佛<sup>蓮</sup> 立<sup>吟</sup>  
多<sup>ク</sup>食<sup>ハ</sup>ら<sup>ズ</sup>や<sup>ハ</sup>い<sup>は</sup>な<sup>し</sup>け<sup>レ</sup>な<sup>し</sup>る<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup> 琴<sup>風</sup>

### 出代

出<sup>立</sup>り<sup>し</sup>り<sup>や</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>れ<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>物<sup>ヲ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup> 鼠<sup>子</sup>  
出<sup>立</sup>り<sup>し</sup>り<sup>や</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>も<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>や</sup> 了<sup>ん</sup>  
出<sup>立</sup>り<sup>し</sup>り<sup>や</sup>人<sup>ノ</sup>心<sup>ト</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>汁<sup>ニ</sup> 陸<sup>珠</sup>

### 様

口<sup>ハ</sup>僻<sup>ニ</sup>よ<sup>リ</sup>せ<sup>き</sup>に<sup>テ</sup>推<sup>シ</sup>安<sup>ク</sup>し<sup>テ</sup>山<sup>ノ</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>る</sup> 無<sup>倫</sup>  
只<sup>ノ</sup>的<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>や</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>の<sup>ハ</sup>様<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup> 西<sup>鶴</sup>  
送<sup>リ</sup>ら<sup>し</sup>り<sup>し</sup>り<sup>や</sup>機<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>飯<sup>ヲ</sup>川<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>山<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>邪<sup>ニ</sup> 信<sup>德</sup>  
見<sup>ゆ</sup>ら<sup>し</sup>り<sup>し</sup>り<sup>や</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>の<sup>ハ</sup>文<sup>ヲ</sup>珠<sup>ヲ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>象<sup>ニ</sup> 西<sup>武</sup>  
武<sup>ノ</sup>云<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>様<sup>ニ</sup>よ<sup>リ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup>の<sup>ハ</sup>様<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>す<sup>ル</sup> 立<sup>吟</sup>

イウケキトハ  
イトケキトハ



名のばらぬわりの山はる  
入水のまじりと深ぬ橋の那  
ちるついで碎のまじりと名さる  
自悦

上京の時よはるまじりと

け地まは二階あつる 桜のうら  
いりおの澄よ瘦るうやまの桜  
撞接あつるまじりと合点  
そと家ハ澄よ用をまじりと  
まぢのりくくまじりと豆腐賣  
思翁

まぢのりくくまじりと 山はる  
蓮谷

月移花影上欄干

月おげのひと極るも 桜の  
也くよまある人毎のまじりと  
世の中よまあれ給るまじりと  
花

花

薄うのりけいさむの林うら  
えはる一都のまじりと心  
是れおるる人のまじりとさる  
信  
徳  
圃



音提山あり

ちる花とふはつゆ院佛とくが 守武  
櫻の木乃むよあふぬすこる 芭蕉  
花修て死ともなり 病る 来山

よ 妙ふ

ちふふよふり 庭のほろふ 古 盤谷

そのとろこ 牡丹の花とあつて  
詩よ抱るや日ののほろふはくらのい  
海へ飯名りの和は抱るなり

よふやう花あみあてあ枝より  
りふにむくわくわくわくわくわく  
あふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふふふふふふふふふふ  
目ふふふふふふふふふふふふ  
海へあふふふふふふふふふふ



ていめつらあぐの風情とよめきりて  
世俗のこころよるふ命の波濤とよめきり  
なりあきしうとせのちよはほきてよ  
とのなりしうせはよめ心のよのーみ  
をぬるさう

是づくさほくろ花の香地山 貞室

西行上人賛

於果て所はあきしうとよめきりてよ  
ちのあきしうとよめきりてよ  
このぬるさうとよめきりてよ

ものすきつハ上州ハ陽 蕉 ヲ 芭蕉

ていめつらあぐの風情とよめきりてよ

眩一せてまらひくしてよとよめきりてよ 貞徳

みらのくの文字摺のふと  
ていめつらあぐの風情とよめきりてよ

まひ出や蹴つまうとよめきりてよ 擧白

房後あきしうとよめきりてよ  
いつらへつらあぐの風情とよめきりてよ

我事とよめきりてよ 未 陌

東福寺よ

禪こゝとよめきりてよ 重頼



むの咳初るよりさぬくつる  
すていあんと思ひいり  
そくゆつさよし古はせ  
そくそを紙せしむるよ

方より何つてを神えんぬをむらり 貞室  
小倉路やむんぬやそし吉野山 来山  
多智の陣と車座やむの兒 嵐雪  
むむと川毎のしよする童か 立圃  
ろく雲とくら粉よりやむの山 水田

尼よりうりて  
ち泰よ何くる比

花とやれらくくや夏の浮世との <sup>うつく</sup>すて

ゆくとむとの木陰のゆみ 立 琴風  
踏舞れむの府陰や 東山 瓢斗

蓮谷亭より  
三井寺の賢

竜宮よむあくくあのかつハるも 貞佐  
くつとら(えいそ)山のむんる 加友

藤

揺ひふふゆのなりや夏のむ ちりよ  
柳をや揺くくそそそ天の川 貞佐

花女の歳且五音下



あゝ〜よ〜く〜きん傍竹 深  
宝引ハ松よ惚〜れぬおなほしや 素  
冷摘ヤリ〜あ〜この明の去 包  
五や公附ら〜〜さ〜り 笈ハ 杖  
みせ〜やな 白粉〜り〜明の去 童

春

ま〜丸よ出〜と〜う〜さ〜去日ガ 宗鑑  
彦路の足〜り〜也〜日 負室  
海葉や咲てちるを〜と〜眠り 重頼

あ〜雲のあ〜こ〜冷〜新茶ガ 舉白  
深川ハ梅〜〜〜似〜り 桃のむ 一晶  
身の内〜皆ロ〜を〜る 志ニヒミ 立志  
刺〜〜布袋ハ〜心〜 宝船 超波  
白菓やる〜は〜〜ハ清ぬ〜し 枳風  
裏茶屋〜〜〜〜新けれ中 負佐  
あ〜海のい〜れる時〜み〜け 専吟  
袖下のあ〜〜〜山ハ海〜し〜る 浮生  
西月とる座〜〜〜して二月ガ 秋風十一年



むの嘆本はいらう二月の邪 支考

系也やうりあけらううらな 隆平

山吹やまはらうとものど 白雪三河

あうらんや卯山の産らう 泰山

むそとーはうつらん水忌の侍 泰徳

世俗は儒醫と唱へるあり孔門は

醫をうり醫をうりて俗はあうり

かの齊人玉は似る石と玉ふと

なつけて市は賣りきらひ子

こそ思はるもこそ有儒の膏の字

とゆて句はらる也

雉子乃毛と豆腐は極る浮世うら 才磨

あう人の書らうよらう

猫のうらうらうてんはう

むらうめらうのうらう

死らううらう

あううらう

心らううらうとらうの猫のうら  
あうらうてんはう  
と後てはうらうと後て

猫のうらうらうはぬる人の愛 泊徳

卯杖とてあうらう猫の書 卜史

まらやうらうめ家うらう 木山

縄の字うらううらう月あう 蓬谷



山さの昼寐くす。涅槃山

日光へあひひらく

雀もも第へ旅出の投中 蓬谷

蛭子贄

祢代よりそ刀ハたそ 櫻網 貞代

夏の部

衣更

一ころろ。袷あたるや黒木賣 其角

衣久あひハ須戸の栞木る 貞代

老曲ナリさよく

衣あへころろ。織ぬ深き色 園女

出女の夕日ふあうす 袷の那 塵匣

衣およよそかられり 衣ハ 西鶴

古袷との見のねよころろ。や 芭蕉

郭公

卯月こそ袷くす。明や郭公 宗鑑

うそハあのみつ。鳴さくわす。次 藻風

鳴く人笑り。いよ。ほく。さす 光貞 妻



亭 郭公はとくき候とて床入きり  
亭 亭の扱すこしゆりて時多  
百 里  
露 川

若根山の地獄とりのふもと

かいたしとけせう責はとくきす  
時多やうやう淀のふらるま  
古茶新茶定法はいさうし時多  
あつらひし起こきくちきす  
手長ハ毒う毒未う何とくき次  
珪 琳  
舍 羅

于 籬のハ鼻そつまめ時多  
酒こきあひけやい日ぬのけり  
蓮 谷  
過や过梯よりけり郭公  
負 佐

若根山宗因よりりりり

飛んさう家も能くやま時多  
一 百まらりの麻の 橋  
宗 因  
風 虎

若葉

先度と目のやうな谷もさるか  
柿のハれしうりるさるさる  
越 人  
專 吟



牡丹

親王とらうそほくの春うら  
 眠る襟をねもよらる牡丹うら  
 ちまとおねいほこのほろが  
 能とつてむほくの糸をうら  
 るとつてよほろいの牡丹が  
 貝の耳とほろくゆるる  
 へおきくとつり牡丹うら  
 あらぬいの逢中つる白牡丹  
 立圃  
 来山  
 専吟  
 琴風  
 蓮谷  
 貞佐  
 琴風  
 専吟

鯉

初鯉とのらつて 鯉の那  
 首の花のうらとあれ初鯉  
 ぶとろよ流あはるるり鯉  
 周竹  
 貞佐  
 超波

戸塚

赤の初ひつる 漁舎 節鯉 英 蝶  
 我恵とお鯉よあつて言水  
 月よはまふ山郭とるり 鯉 素堂  
 人のやうとあつて鯉が 其角











あつたふまうつとんそあつ田植が 菊補  
ふし切や皆横う月ハ日一歌 隆平  
ふし切やあつたのう一は巻下 弘政  
あつたふまうつとんそあつ田植が 乙由

牧

あつたふまうつとんそあつ田植が 貞代

避牧辞

宗因述

あつたふまうつとんそあつ田植が  
あつたふまうつとんそあつ田植が  
あつたふまうつとんそあつ田植が

あつたふまうつとんそあつ田植が  
あつたふまうつとんそあつ田植が  
あつたふまうつとんそあつ田植が  
あつたふまうつとんそあつ田植が  
あつたふまうつとんそあつ田植が

あつたふまうつとんそあつ田植が 宗因

唐の牧を詩人とくして  
あつたふまうつとんそあつ田植が  
あつたふまうつとんそあつ田植が

あつたふまうつとんそあつ田植が 嵐香



人妻のちやうやアツククと〜  
 う〜めて仲よちいさ〜るる  
 ひくゝるの浪已〜るぬきりる  
 初船屋や〜い〜きぬ板のぬら  
 友の月船とぬ〜てみ百友  
 面影の〜て〜く〜すぬき草  
 ちやうやひ〜〜〜  
 るりちやぬき釣〜〜〜  
 蓮  
 キ角

蝸牛

猫の〜の〜してあるや蝸牛  
 宇賀津は十三ぬ〜なる〜  
 馬お玉のぬ〜は角や〜  
 ちやうや角ちやうや〜  
 文七よちや〜船屋の〜  
 才丸  
 貞他  
 雪吹  
 ちやうや  
 キ角

炊煙

漁力のも〜出〜る〜  
 岸舟よち〜れ〜る〜  
 春泥  
 其角  
 ちやうや  
 ちやうや



秋らうくーその代ハをー鳴堂 一 疾  
其のくまー川向れりほるる 欠 他

宇治川の管ととの世ハ

かーこさよ合戦なりーは花堂 許 六  
親なるーふしなりー宮よ花堂 去 院  
通ふハ既中よ包む管の那 阪 波  
跡えのくくおるの管くる 蓮 谷  
愚よくく棘とばくむ管なる くら 成

鴉 舩

物をきしよまうさハ人の目よ立派 信 徳  
あまーろくしておてつるーさく無 くら 成  
る灯籠電燈やよ消り物毎ハ 千 角  
ふまふかーと子の声くーさうおん 欠 他  
松島の消えて飯くよく船も 蓮 谷

虫 干

濱着てけくれ半あさ人土角干 去 来  
虫干や一息を通り宇治の山 貞 佐  
しー平や心の猿ハはまーとと 百 里



出干やんぬ世の白ひ糸ははは  
蓮谷  
捨んや木もあまかけてち用干  
干角

蟬

かて死ぬらーさかんまは蟬の舌  
芭蕉  
かろくよまかり果て何と蟬  
西武  
せこくの神小蟬鳴夕日うま  
杜国  
もうてるや蟬と雀もぬるー  
其角

日者

知耳入のころー他ノ人異々の那  
珪琳

日の名やあふれてあつさ牛の舌  
正秀  
着ら又あうふ扇の異々のか  
貞佐

抱女の贅

川竹のまろねとつと異々のも  
超波  
夕飯ハイヤとら妹あうふ異々のな  
珪琳  
負うつさあま松皮なうつさあは  
園女  
務もまけしぬれてもあつさ梢が  
其蒼  
異々の柳のねつあまなし  
安士  
瘦あけしえ也も人の異々の柳  
蓮谷



ふるふる〜も膝を冷やせる思ふる 宗瑞

納涼

切筋の足音ははく涼の音 浜徳

夏の夕と送るもあり夕涼 貞代

涼く〜門て笛をすする夕の那 琴島

玉塚

清のまや鬼あふるとも夕すみ 千代

とどろて実のつら人の涼のる 蓬石

ふとふあやて火宅の心の涼が 玉珠

扇

玄人の紋あつげさるる扇のる 尚白

夏夜けりち〜もふはるるな 玉珠

撲や〜嵐の冷〜あやさる 玉珠

あゝる日ハあり〜も〜扇のる 玉珠

清水

日ら〜りの思より 緩る清水ニホレ 常牧

楊梅の着てさふつ〜清水の 未陌

る佛が〜ともあ〜ん〜の 一晶



あつちの流きて通るはらるる

荷兮

蓮

ろりりや蓮よらんきて居心

湖去

六月の地獄もさく蓮う那

瑤珠

蓮の葉やけと林の山斗

貞信

小川の深おろろり蓮う由

皎而

延喜のころりきくぬつと蓮山

又美

白雨

ゆららよらぬおろり小会河

不ト

雨乞の歌

夕さらや田とこめらりの秋まひ

キ角

ゆららや牛の糸乃林原きて

玉塚

白うやほしあつとぬる日中

蓮谷

夕立やさしあつ人の腕まひり

雪吹

あつららや赤屋とあつる傀儡師

キ角

夏

香月花つたよらんするお月山

貞信

吹礼の持らりりり反映るる

冬歌



暖帳

乞食のる天地と云ふる 交衣 牛角  
 何れも他はさる 根乃 寄とらる 芥子 欠位  
 交けやうららの 卯よ 松おが 一晶  
 月洋や 松糸 函へ いる 比山 活法  
 いとらちよや しあろ 帖と 釋迦 一珠  
 灌佛や 乳ハキ じゆん 比丘尼 ち 乙由  
 めつしや 入梅の 中れ 早の 雲 曉山  
 ハキ糸や 活さる ちよん 虎 ちよん 牛角

舟人のこころの 是や 中一の 舟  
 ひろくし じゆん ちよん 山椒 比市  
 ちよん 温公 ちよん や 糸糸 瓜 活法  
 かんこ ちよん や 雲の 心と 種と 似春  
 ちよん ちよん ちよん ちよん ちよん 玉珠  
 竹の ちよん や 暖帳 ちよん 矢の 指 活法  
 畏灯や 早の ちよん や 一の 帆 ちよん 活法  
 ちよん ちよん ちよん ちよん ちよん 素堂  
 け 裏よ 有常 ちよん ちよん 相の ちよん 冠 冠



風辨

嵐雪述

ちりあすの毛いもらて襟のゆらゆら  
 はるら飯粒のまじりたるものゆきありあてら  
 そくくおのしり新し新し目鏡や久し  
 きて集りうぬと何ひんるよゆき肉思  
 さ腸呼吸よつきて動揺ゆきくまふと  
 きりり〜とんす〜はくはつうさうありて  
 怒けなるら護ら堂よゆ〜ます明王さ  
 よ似〜虎とも戦い竜ともあ〜る〜  
 海や必死の人の床よハかりありて

あ〜い〜あ〜い〜と〜ん〜ぶ〜ま〜は〜ん〜さ〜れ  
 い〜と〜死〜ぬ〜き〜〜人よハ尻むけてゆく  
 お〜ら〜り〜〜と〜ん〜ま〜こ〜〜と〜さ〜と〜危〜れ〜已〜  
 姿のかりてのまよあ〜と〜ある〜ものうハ〜き〜り  
 くらぬハ声のあきれ〜也〜と〜ガ〜オ〜あり〜ら〜  
 けり月のあ〜ら〜ひ〜と〜ち〜の〜や〜ハ〜す〜と〜と〜  
 義忠よゆ〜ら〜る〜鬼のま〜れ〜ハ〜あ〜ら〜る  
 せ〜ら〜と〜果〜〜と〜家業けの終〜



いづはるまきれ真輝の中一箇眞とせ  
 て禪より終目し後して人の血氣を  
 犯し吸ひ取り給ひのされ法年とあじより  
 秋甚しその生涯の終まる不ハ火九の中  
 子細お煙とせぬい本枕の角は明しに  
 恥しハけしきとぬされいふ如の性れみ  
 てるるや麻竭何とらいつる笑の百由  
 旬より雖鎮の激細なるやもあけりて  
 て憎愛あはるるうらみとそえをゆれ

肉裡におけりたる聖りのら灯の光り小一  
 ちそみ捨つてはるるわの化のさうかきり  
 ぎるとも知識の肌は剥きとりて極とわし  
 ういひきりきりしるるさ因果や柱の穴  
 よ生とてりて旧年のあへんはさ報ふ  
 ともさあれまわりのうめゆる一とと  
 かねるゆねなり滄とせん地獄までもちあふ  
 なるよちりくくとあけてらんを流るわしつる  
 つと終てあなうともしむしとあ——例よ



物もはせし人の息しつゝのちりこもてしり  
まはしつゝのちりこもてしり  
果ぬ白身坊々衣被きしとの

題 風

交衣つゝの風しん毛はくくさん 芭蕉  
露結ちつゝの窓の雪しんめく 其角  
昏しつゝの風しんすつてはあまの 才磨  
つじつゝの果結しんくは風か 尚白  
穂を伴ふありしはよき風か 沾洲

売しつゝの風しんくさん 大田相 琴風  
ちつゝのすつや富貴の風しんの中 濟通  
瘦てつゝあるる蟹陣の風しん 序令  
風ありつゝのちりこもてしり 百里

又 虫

不二の山もつゝ糸白乃山白ひる 芭蕉  
糸結しあまのちりこもてしり 才磨  
ちりこもてしりつゝのちりこもてしり 嵐雪  
ちりこもてしりつゝのちりこもてしり 尚白



香よ似て〜〜〜〜〜 名の象なり

百里

享保己酉の〜〜南奥より〜〜  
象と日本一〜〜〜同月廿五日  
江戸よ〜〜〜泰平よ〜〜  
あひて象と〜〜〜

天竺の帝友かくや〜〜〜

沼洲

大なる傾城あゆ〜〜〜

青峨

今や貴不二の〜〜〜

京 仙鶴

まゆら〜〜〜

泰室

而〜〜と牙よ〜〜

超波

その鼻ておる〜〜〜

蓮谷

夏の花の早〜〜

蓮之

みよ〜や海と象の象は〜

貞佐

乾の事〜〜〜

源六

江戸書林



明和五<sup>戊子</sup>年十月写之也

誹諧温故集之下

東武 雷風菴蓮谷選



秋の部

立炆

凌宵の巻吹消しぐと朝の秋	乙由
こ夕もいとやむく川の夕の秋	元隣
かさひくの尻をうりや夕の秋	尚白

ひうもあとりふ字と質よる並み  
るとはまき斎師の風流

あゝあのみ秋もとりてと朝の秋 蓮谷



乞切奠

七夕や燈とけさるはめのお  
 芭蕉  
 其角  
 乙由  
 才磨  
 貞佐  
 白雲  
 珪琳  
 沼洲  
 超波  
 濟通

鶴の橋や捨への百人一首  
 許六  
 相一葉や一ふくうーこの川  
 菊輔  
 鶴やとのさうあーとはい板  
 超波  
 昆布のすずのたか通いぬ天の川  
 敬雨  
 せられいの尾も尾とつけてこの川  
 蓮谷  
 漲志のけろりと浮や早はくひ  
 嵐雪  
 月の七日燦つて早の舟なる  
 宗因  
 天地と題とて

天はあらしひよこの羽と早の書  
 宗因  
 地はあらしひよこの本賣はくせつ  
 其角

玉祭



穿つ小舟よ揺る魚なり玉まつり  
みねし子のまやうらんあて玉糸  
玉柳やいやつまむる燈のちる  
月よ見えぬものいさうし玉まつり

燈籠

言燈籠ちんちん記よハなうりきり  
言燈籠唇ハおし記ねう那  
ふる人もまはり燈籠よあうきり

盆の月

淋しこのころはしめなり盆の月  
ぢやむとくのうれてふるや盆の月

浮世のうき名はくし盆の月

踊

橋立の松そつう出まおしうりぢ  
朝夕よふるまふる踊う那  
空折のなして踊のうしきなる  
刀更の袖ちれて及ておしうりぢ  
一まつりゆ人こまきおしうりぢ  
一長巻渡りあらしおしうりぢ

稻妻

いさつちや淮月うら出て雲よ入  
稲妻や石臼耳よあしきやうり

春風

超波

餅夢

乙由

貞佐

千那

其角

蓮谷

瓢斗

大梅

氷花

晴し

貞佐

浪波

尚白

千角

山夕

高玄



いたつちやねたさくらさだ守の座  
稲つちの裾とゆきやまの上

秋風

秋風や兼し鳥も不破の園  
煉石の心くさぬ縄すくも  
版あてや背よあつら秋の風  
古のつらさとの出来て煉の風  
秋のやうに吹さくす膳木の味  
あつらとかけ初る齒や海の風  
秋とつら風ハ方よーじ薬の那

露

白露やそふおなる  
物もや指よささなるうつ山  
あつらやう角よ目と指くつら  
白露やうふせ一分夜  
みつけとやとくはあつら

女郎花

愛念の其根はうねど女郎花  
月のくさくさなるやとくし  
物人はまゆさなるやとくし  
粟のほのこし教あつらとくし  
口明て笑ふぬむやとくし

東漸  
ちよ

るを成  
嵐雪  
雪水  
又莫  
瓢斗  
秋風  
キ角

宗因  
肅山  
鼠音  
桃お  
玄札

梅盛

涼菟  
ちよ  
すはら  
超波



猪こころこころよ気なりー女節ど  
女節どきこころあハの目ゆるる

朝貞

朝貞のたれ角咲てく交せうる  
あは息よ憂とハ家のけうけ  
草床やとらうくーよ海士のうけ  
朝貞やんきちいさ記新ほし  
朝貞や病れいぢく九十九坂  
阿ふほや其目くーのむ乃出ま  
朝貞や死ねハ生れくむの秋  
朝貞や三端うくーこの松と

古  
青嶽  
季吟

常牧  
来山  
專吟  
貞佐  
珪琳  
杉風  
蓮谷  
沾洲

蜻蛉

えんほーよ夕言る馬ー那  
えんほーや死なもーまの枝  
萩すくーん種くーんえんほる

虫

海草ややすうーあうす虫の色  
悔いふ人のこころやさうす  
けりもの陰なるー虫乃さ  
本花地所言もよのー虫の声  
手よれハ声ハかきこさうくす  
脱きうよなうーひて死ぬや秋の悴

沾洲  
超波  
珪琳

去来  
大草  
鬼也  
沼波  
智月  
大草



いづつーや蟻織し最次更の声  
甲むー鳴や雨風の古哉場  
秋の初よ入てなるとや裸むー  
はそ聲を、白髪よ鳴きうま

薄

淋ーよの急よはんえぬ落の角  
角文をやいせの飛相のむし落  
梳つー身より出とふ尾をうぬ  
蟻織中の淋さくる落うま

秋の月

月や何々ぬ我身むしらの影ほじ  
貞徳

月をろやむーよ近き頃この浦  
蛤のううとむとこをろの一月  
我と連て我氣入る月おるる  
江の月や深み深みの蜷うう  
天の戸のすうーぬうよ二日の月

深川よて

舟もや照月なると摺るうひ  
貞代

月撰文とらふ題を

関ちとうけあつん不被の月  
百宵や笠めす月のうれ兼  
有内や二斗と新推の摺より

虚谷  
令徳  
貞徳

尚自  
其蒼  
琴比  
立志

鬼琴  
キ角  
地亭  
鼠雷

鬼琴  
立圃  
素堂  
柳立  
光貞  
妻



一楸とりても月の本す久くる 貞代  
衆なりて配一の月や侍後せれ 千角

炭應元年八月長政九より

貞代 西武 一息とゆるし 竹石

時柿園母子興り

天ありく子とせむむるや秋の月 貞代

海ふちとこのもの夕 斎 貞室

鳩鳥とみらぬ松千孝アえく 西武

李夫人去漢皇惜

月之在中姿とくめ 袖身 煇 貞代

楊貴妃歸唐帝思

名月やゆるとのよそ 澆 五 貞代

會芭蕉菴辞 山素堂

ととーとせ成彦よ月と既<sup>モテカク</sup>ひてき月とりよ

越の人あり筑紫の僧ありあことと平海草の

くふまよあふるふとーあふーと海空

流れの身とーして石山の雲よはまふみ文科

の月よ嘯ふて居る海るいよとーいくかく

とあふ吹草よ月よ僧されて吹草るる

いそりーいそ那花月とけあふいそ海あり

ーいそあふとそ青と黄とらとらとらとらと

あふあふの梅あれは世中花の詩人忘れ



とくは似たりきく我玉の風月平富る  
りるる

夜亡よ不二あつるりよの月見せよ 素堂

翫月辞

野立圃

常はお付し人くとまの月の夜よとや  
又んかーこよとやとつひ定めて日のうちより  
出にほひあしきるる月をすうは名をとねー  
光りたりとくあつるりつらつつけて  
ひうー今のまの葉の敷く思ひ出さき我あ  
らある心よりさあつるるのぬくま出らる  
とけ人くは同よとまのハ名よま月とつひ

けささーその名そ何とりよ名えと  
いと人く笑つりやあつるりよ名あつあ  
花の都名よま日校の山名よあつま  
月の桂川よとこまいよまひの名とこま  
いとんる思ひよます月とはうりハ  
いまよとまつりや

野立圃

いよとつりよまは名ひつりく

あつぬ名よえそつら月のとまが 立圃

良夜

名月やとまのせつりよあつし 信徳



名月や耳の山風月のくもり	来山
朝のむらぬ里とありけり月の	西鶴
名や廣き大子世界月むらり	立圃
そおろくを休むる月をんか	芭蕉
馬帽子屋の月をんか	其角
名月や柳の枝とそらへ	嵐雪
そけよ雲こそ包めり月の	路通
芝海やの替もあま玉てり月の	貞佐
新月や海をくまふ	一 京 琴風
粧をの泉あはる	白雲
名月や猿よりそと我寐時	貞佐

こゝろをよ定る日あり月と音	山夕
湯釜の古さよりふの月よ星	黒露
名月やそらと層の	丹雲
名月やなりそらと梅と雲	菊輔
名月や岩蛭子のまじり	蓮谷
頃ニは八平家町よりて月をんか	花雀
名月や白ふよ黒い層の色	蓬谷
名月やちりそらと雲	其奈
名月や空ハ朝日のよけ	秋風
二千子の外ハ代人の月見	石海

鶉



うつゝ一とありとハハニて和泉島  
屋根なりまハ源氏の繪之鶴亀  
書ろもも之麻草之と解る 鶴くる

雁

西黄よりり雨板の厚く  
初ノヤ山ハ配まそし形もきく次  
ろろ一ヤ一声そくくも一う関  
初の字ハけ方ろろろ天は厚  
ろろ厚やおりふ田一き一と一  
初厚やわりの厚母よ月ろぞえる  
ろろ厚や疏ろろろむむ松の声

休甫  
吉  
志  
貞代

キ角  
ちよ  
乙由  
蓮谷  
浜池  
陸珠  
蓮谷

ろろ一ヤ艘も立はく一男やう

礎

猿ハ猿の小袖とまめこりな  
古白の火燧を思ろろろろろ  
ろろつや耳ハろろろの遠入口

鹿

麻の声ろろろよ角ハろろりりり  
関ろの白髪古の袴古や麻の声  
麻の尾やおの襟一交後ひま  
麻の舌や雲山よの形と並の果  
笑ろろろろろろろて細一麻の声

貞代

志せ所  
飯足  
蓮谷

乙由  
蓮谷  
立志  
乙由  
蓮谷



花麻も揉んである麻もかゆひか

桃蔭

鳴子

持石も踏んで休む鳴子うら

玉塚

浄土の妙法蓮華の佛舎とて

法花経の縁もわらう鳴子うら

蓮谷

あゆると麻もつる鳴子うら

キ角

稲花

水風やさると風むいねのど

貞代

世の中は命あつめて稲の花

沼波

紫山子

と合ふも初はあつてぬか

笠翁

酒令よ縁なりよ世のあつて

乙由

乃々う拾ひあつめてあつて

桃蔭

秋暮

あけの姿も秋のゆふをうら

宗因

おいとぬ人持つてあつてのうら

乙由

耳はくのひとつてあつてのうら

キ角

廣沢や春負てくる秋のうら

飛鳥

立出くうらあつてあつてのうら

嵐亭

自画賛

あつてあつてあつてあつてのうら

とせ成

松崎



清くも著て色もや 蝶のよ 御立

母よとくれさるまとおれじ

あふれ子や指飯くふ秋のくれ 尚白

かふ山のふくは並ふや秋乃著 辛角

紅葉

日入とも半時清人かふおれか 貞佐

れ燈のたぐくあはまといららる 乙由

小ふとこのわくしけらふや下おれ 秀和

いるつまよ下際させておれふくふ 蓮谷

ちるさるも色もはくさこのおれふくふ 立圃

菊

かんさんののみ痛ハ園よ菊咲り 庄酒

菊さくや飯よまきあの際時ふ 蓮谷

松の尾よ杜氏通取して中菊 貞佐

秋さつきのたごささるやさくのは 超波

さふくのもる原おや菊の花 蓮谷

みとらよの百合よ合ぬ菊のり 無倫

芦穂

あーのささる魚かしてあけるさな心 文草

芦のちやまおぬくさくよちるあらん 路通

十二夜

十三夜山とるさく山家松金もさし 貞佐



流石

三日月のおはるる魚あり十三夜  
流石の面よ波のち深や十三夜  
舟と山と観えうつて十三夜

珪琳  
負代  
乙由

栗

大江山より

ゆきとろど鬼住跡の梨木のいっ  
いへうよ袖なりよ猿の思ひこりな

素堂  
其角

葛葉

齒の跡とあり葛の葉のうら表  
さのふとさうよきとてしう葛の葉の

嵐雪  
宗因

秋雲

秋の中富士といふくよあつらき  
吾神氣とくうきとて白く燈の光

ト尺  
鬼貫

秋

四下雀をよしよふぬ山路こりあ  
さの石のありともきくしては十うら  
ていあや破みくのうれて燈のむ  
あ〜〜神や焼とらこしの骨斗  
草摺やこりあう袖と冷こり  
夕月や秋ハ籠よせ〜〜  
舟よなり帆よなる風のこせあか  
武志神や仲ハあてのそくのも

慶友  
芭蕉  
言水  
其角  
常陽  
乙由  
一晶  
出雲  
風水



宗祇法師三回忌

世にちれと地獄へ落ちぬ一歩のうら  
秋の田やゆりけくして稗二儀 尚白  
をさるやり事ありのふくれきり 魚倫  
穿つふらと推るさきさや 蛸 貞佐  
世にれいやわらひ思いて思のこ 超波  
六舟伝やううなつく袖みえか 蓮谷  
足は火のうけよふくしてふぬらぬ 琴風

對園女辞

西鶴述

何智山所々見え世の奇人今の世にいせのふより  
田といへる女の誹謗とこけて溪荻の糸をさ

浪速の里よ志しての我よ娘しく二足笥硯  
の海よと見えて夢のうつつりするさおと身  
らるる思ふゆよんうことなぬさく一足負の  
妻萱糸の袴なるとむよ志ほくくはれおらう  
世に涙の粒よ一は名とらう月月の珠よけ世  
のふよ志ほ一の舎りとなり一津川の伝  
より一のまともいさくれとらおとぬきゆ  
溪荻や高むよさる女 西鶴  
又月やゆりハほ一は娘の子 其角

みやけと禰さる人あり人丸の  
柿の実山の色の葉本のうらうら



ぬきのよあやうりなりと笑ひ真し

栢の切らき地山の本の実アんと 嵐雪  
 沈の月るそや目よすきと秋の立 一晶  
 枝更やせく蝶との切らき衣 超波  
 蒼遠くや松の戸塚のそら口 敬雨  
 りぬや虫も信して草由ら 蓮谷  
 せ流る月のかきこみけや墓まひり 珪琳  
 八鈴やあれのまき 超波  
 鞘ける葉のゆかや不ニあらし 馬光  
 くのうよと心あきいり 秋の輓 隆平  
 節まきよ秋と脊負ふやひく法師 葛翁

日かひと露の解や墓まひり 其角

冬の部

木枯

木切りの果ハまらう海のまき 言水  
 こらうしよ二日の月の吹ちる 荷兮  
 木枯や色せえん次ちりもせむ 智月  
 ありしや俗の目よえんおあす 蓮谷

貴、船にて

風よ月の色もまらう山うる 同  
 木くしとくまらうつ尾長る 珪琳

時雨



一順の尺句めううく一 時百 宗因  
耳うやく耳ふんるゆふ志くれうな 一 晶

風声天地の響ううなりとあり

天地のくろくーとささくーとれる 湖春  
そのは木乃ぬれを穿りて 神時百 乙由  
えうおくや常のつうぬ小倉山 超波  
月と日は皺とよせくる 時百うな 珪琳

苗麻さるよく

さよーくも人と身とする山ありぬ 其角  
ゆふくらのわくくささるえくれうな 黒露  
いうつちのかさハ眠たる時百か 宗瑞

祈鳴よりく面白ーじく 時百 餅夢  
何とれ船ともんえ次 初 時百 耳谷

落葉

木の葉あたるむくさよはゆうむ持樓外 春澄  
まくとよと日月ふよとさるあうな 素堂  
黒木電煙もとのうさるあふうな 貞佐  
ころりーの森はなりうさる落葉外 乙由  
果はるる作の乃平一落葉あうな 珪琳

篠田森よて

昔の葉の心もよとてさるあふうな 蓮谷  
初雪



しらやうやうさるのさよひえの山 如泉  
神や甲ようさるてあきよ亀 白雲  
はつやうやう系の元よ大文字 宗瑞  
初やうやうさるよハ人よよする 超波  
初やうやうさるよと刺人よあり 安士  
ころやうやうさるてあきよ小笹の音 木因

雪

白炭や焼ぬじうりのやうれ枝 忠知  
雪の松首根もろくさ名不る 宗因  
うとん屋へり念佛たりおまの雪 其角  
何と見ても雪初まおもるし 徳元

秋といつと連てまの秋もろくさ りよ  
秋子なり休よハやし秋の雪 ことめ  
雪うて我よ麻よとの雪百か 路通  
雪うやあれも人の子 指拾ひ 作者不知  
はつとすまむ丹波の粉雪か 休甫  
武系雪雪の折つとさるも南し 欠竹  
意といつと雪うくや雪の門 玄来  
雪の折つと採ころんて雪うくさ 徳山

必死の吹

山とわくちうも折さつ 松乃雪 大高氏 子葉

寒山賛







首根崎より

珠敷しけて二羽飛ぶ鳩のそとる

蓮谷

麦林房敷話

灯心のありしけり 嘯をきく那

同

減子のやきも扱ハ紛れ

乙由

隣々令そ牧の松とまき

巴新

霜

白仙三老と扱話せしは

古きや穽切大根のそとる

東郷

徳坂の老刀あつるを扱扱うる

と荒

ふるら

いゝと麻と扱

蓮谷

初まや倉よる

神坂

妙成童女と弄して

雲の落上へやと人も被うれ

キ角

霰

心つれて反橋と扱

寺新

花脚屋の中へもつる玉あ

耳谷

受岩山より

土忌と扱てうけ

蓮谷

菅笠よかるくも

同

土舟ハさても

貞代



紙子

わづらひのこゝろいけりける紙子る 木守  
名少と襟は細くしてわづらひのこゝろ 房川  
定波のまゝのわづらひのこゝろ 蓮谷  
定と切きわづらひのこゝろ 玉守  
隠逸傳とよみて

氷

隠逸の名もさうわづらひのこゝろ 蓮谷  
茶のまゝは我と蓋する氷の那 宗澄  
餓鬼の目とおひひやする氷の那 貞室  
九海へ舟わづらひのこゝろ 沼波

一休和尚とゆゑの二字ハ常ニ忘るる屋敷の時

情出せば氷るまゝ 玉車 理珠  
柏葉のつ子と對して  
獅子の子が投てすなぬ氷る 貞代  
昔はまゝ

鉢歌

さうらの言と伝はつて氷の那 蓮谷  
みまゝの言と伝はつて鉢歌 共角  
清き水とゆけそ名や鉢歌 素堂  
今すこしと名あつて鉢歌 昆方  
世の中ハ是より鉢歌 尚白



ふりくくく麻走さやし神扣 千角  
神鼓いよよ浮せとよ茶せん 松友 弘波  
七嘴の墓も先くもや神くま 七世成

舞歌

曹其角

神きくま〜  
くくく麻走さやし神扣  
七嘴の墓も先くもや神くま  
七世成  
神きくま〜  
くくく麻走さやし神扣  
七嘴の墓も先くもや神くま  
七世成

舞の古〜  
七十 古来  
やけこ居心  
酒子思〜  
あ〜るま〜  
あ〜るま〜  
あ〜るま〜

あ〜るま〜  
あ〜るま〜  
あ〜るま〜

須中

うらり〜  
纏す〜  
いろ〜  
須中  
木孕  
柳若



生駒山登るかへ〜そまう 既中  
人形のまじしな〜〜角幣  
山古の味噴つ〜ハ皆既中  
世の中〜丸いあ〜まよ角既中  
道きは初と切らす投既中

火燧

懐ちや火燧よそまのさ〜るす  
飯棹と猫とま婦と火燧る  
火燧これとす〜じる人〜磨  
竹ハ後〜〜るよ〜〜る  
つちま捨子〜〜る火燧る

古  
吉 峨  
舟 我  
隆 手  
蓬 谷  
浜 酒

妻 院  
奉 白  
貞 他  
支 考  
蓬 千

我も〜〜〜ハ抱ハぬふ〜りノ那  
いろ〜〜〜る赤氣と火燧ハ

火桶

抱て痛ても肌ハゆる〜ぬ火桶ハ  
〜〜〜ハ抱ハぬふ〜りノ那  
火桶抱てお〜ぬハ麻と〜り

千鳥

波風〜〜〜と中〜〜〜交子る  
一〜〜〜二〜〜〜の〜るる  
指の跡〜〜〜や淡ち〜り  
意〜〜〜も〜〜〜と里前珍

古  
立 志  
珠 琳

貞 室  
宗 瑞  
乃 庭

貞 室  
巴 那  
史 那  
蓬 谷



夏はなるまよぬりらうりか  
其谷  
冬はまきり我目よなりさよあき  
其谷

中三石の漆

よるりよは雨なりり漆候ちりり  
蘆谷

ある人のまやうり

まけやうけ揃つたる友らりり  
瑠璃

網代守

膝もよよ月そとれあーろき  
木守

網代まきり治のまきりことなりり  
許六

恵心まよまきりあせてあーろき  
支考

つらつらのまきりくもまきり網代ま  
昭波

しうしう茶師の甥なり網代ま  
蘆谷  
能持まきりなまきりあーろき  
貞佐

冬籠

令屏の松ぬむりやまきり  
えせ成

大松とらふ味方ありあきふりり  
瑠璃

しんくの跡まきりまきり冬籠  
百里

人を吐息とまきりあきりり  
千那

まきりまきりまきりまきり  
貞佐

けし〜と籠のまきりまきりり  
キ角

白見世

白見せやけ二丁所ぬのま  
巴人



月をやけ朝日の目れきさ  
露をせや足月よそふら良の京  
かほせや是も常之化の夏の目  
くみんを海竜王の姫かきり  
陸珠  
沼波  
蓮谷  
古  
香露

寒、念佛

算よりふ麻西とありき念佛  
まゆらりの夏卯とて念佛  
海飯の飲ほそいうよき念佛  
貞代  
蓮舌  
牛角

冬、

せこの者来つよや月くとあり物  
いわれて大根うまき月  
与武  
信徳

半是袋のむくハ茶湯とけら  
鶴の巣と喰ひあくる其のまう形  
茶のむや利休の目よハ吉地山  
とらー盡て病れぬ仙の炭火亦  
たぐくもまきまじやとありうらむ  
茶解やあ〜ぬ茶と茶と茶  
一珠  
其倫  
素堂  
末由  
素秋  
茶白

半醉半醒の辞

社成るな〜ハ時宗ハら〜ら  
酒并や江戸の景てある目黒山  
急ひす海泊せて人や玉たすま  
曲  
貞代  
香吹

東海とほ唐和尙の古慣よて



ちるひはかたて鼻ふくさくろ那  
 龍巻るやゆると屏風まきろく  
 まこしなや芦の一本と宝舟  
 旅袋の海まき波のふとる  
 十月やむも実もなまき墓多  
 ふ、えぬ親ま常くまひし海  
 枯れぬや筑波むとろハ仲のふ  
 かし鐘もそえ世の艘もまきの内  
 ちるひまのぬのらまきやまき保  
 糸のものをまきくつてまき那

玉珠  
 柳花  
 を里  
 兼輔  
 玉珠  
 キ角  
 百了  
 芭蕉  
 宗因  
 季蹊

大なる  
 1  
 云

いせのこ由へ又通のこりよ  
 萩の葉の枯てくれくろ又通る  
 雪も一首よまきろく年の内  
 山脚なハまきろくくち松川

蓮谷  
 乙由  
 其角

煤掃

嵐も者ハまきろくく煤まきろく  
 夫婦してまきろくまきろく煤掃  
 大星のいろまきろくやすまき  
 煤まきろくやけまきろくまきろく  
 おろまきろくまきろく歌よ  
 煤掃の埃と泳て肘まきろく

幽山  
 乙由  
 同  
 玉蛾  
 蓮谷



町人の流るつつけうの煤はるひ

菊輔

年暮

草法天もつきてとるうきの言

貞徳

年のまはらつ月の座なりはる

貞室

月よまをく耳はらうあ年のくま

西武

貴つやうやあはらうてそ忘

玄札

年まぬり立ふてわりらるる

芭蕉

白髪は雉子拾ひきうの言

言水

おろろーや女の目の年のくま

信徳

いぬくと人よいれりうのうれ

路通

か息して起ておろろく脚をる

雲鞍

人形もたうとさうせ年の言

貞佐

享保九年

卯辰やいせの山田ある橋氏の言

ゆりせしてきて言はゆる

十四年ふとーそ六ろーの言

あう保て古石のあうは海邊の言

とらやうはらるるゆわのあうは

さふとあうはらるる言のふ

別也とらあうはらるる言

鳥ニ護増賀ノ夜ヲ

第一羽境もをーと年ふり

支考



花ニ感ス西行ノ時ヲ

花よりくく涙や志てまがれに  
 はよりこゝ一年のむらゝの牌をうら  
 大年や しのめのむすねのお思ひ  
 おもさのよひ言鞠のまうてぬし  
 おもひくや位も笑ひれそゝの書  
 交とむむ身のさるはよきのくさ  
 手波やそ分う流ととと〜はま

同  
 徳元  
 其角  
 和英  
 光雪  
 文隣  
 珪珠

あここの浦よと

月と日のさしひのさるれく牌をい  
 やよ入てとば〜心と牌をうら

蓮谷  
 素堂

光陰道行

晋 其角

書戸とめてあふよさる人目とかられ里  
 あるあ〜〜とららん破き扇の要より  
 踏ふあひひそ首のたれ〜〜みかハせし  
 二身や作勢の神句のさるる〜〜やうから思  
 小車の我〜〜およね〜〜ハかの社成の  
 志のひ書あとのあさ〜〜〜子さるは  
 月は〜〜よう〜〜れ女の泪子〜〜るひ  
 予言ハる〜〜記〜〜て写来と〜〜つてり中  
 とちけてお〜〜巳の目れ緩ゆる〜〜ての  
 折るひ〜〜のむか〜〜川や〜〜く激と〜〜け



てきそらうらうらんとそそ スツトソソ  
折てハ志とくうつ折きん枝の下よりと  
黙とさうりー石とありルふ世の中  
うふふとあふふふふふふふふふふ  
又おぼ坂の園ちと一板ハゆるせとやうか  
ー百板とあふふふふふふふふふ  
声、ゆきの中うもはは 柏子叶ほえ出  
あーとあふふふふふふふふふふ  
とくや、休足の星よめわらるるよめう君  
のふれらうらふふふふふふふふふ  
は地獄よあふふふ

流もやうてなーまん冬蓋 其角  
川つぎて小松ハハる流う那 同  
種流の色とくうん 古毛 同  
ちとく次我や流子ひくれん 同  
松くくつて空へ舞ひく流うな 欠也  
流くも涅槃の輪へ流きり 云も  
るるる盆や帳と流の葉まわむ 抵儀  
流くくして流あつるおとよ<sup>ミヤカ</sup>那 百里  
めくめくる中よ流のななくおが 欠也  
あうあうよ流の葉のうくくらん 立志  
あうあう流もあうすくくう那 園女



蓬萊木の葉も海より荒ら那  
其角  
妹ももろ荒のりくさよもき  
其角

湯成上倫  
其角

君臣有義  
其角

家より多きりよと忘れ手忘  
其角  
飯蛸のよのききくくは河内哉  
其角

父子有親  
其角

純けや婿も娘もハれられし  
其角  
かよふくしやを兒丸の桃の家  
其角

夫婦有別  
其角

沖鼓めおと出ぬしありれ  
其角  
けよよのむし石よも節くうれおる  
其角

長幼有序  
其角

禮よハ娘のよこもくうゆうな  
其角  
梅おろく鼻とさうーかややう形  
其角

朋友有信  
其角

君よよ入煙よよと思ひ去るをん  
其角  
有なるーの世話やいさむる雲の衆  
其角

答雲虎和尚  
園女

ら書の方紙紙ーヤハ求真不求あた







浪り立てつるうづのにおおのふ 其角

六の八の四天王大江山へ後向のう

若梁や浪公付うは及乃ううへ 山夕

千より嶽とせしるるう

あまらけい風着るとなりり山内うう 嵐雪

源義家弓るとぞむじう

鳩うや八幡と帝うはしめ 氷花

同奥州攻のう

お九手歌よーとてとむのの山 専吟

新く宗任都よとてとと詠とるるう

川に孤ハ字古よ浴り梅の花 琴風

平太盛祇堂の火とゆーと組ふせう

麦ワくのひりうかきうーや月宮 浮生

源頼政鶴と対るるう

うーやう八幡とゆあゝの郭う 沾洲

平お國清盛と友佐と進むる

たよ鯉安う平カ取の着ううる 露言

富士川よと軍兵とるのおちよかとうく

あまらけい いてかくひやうゆのきるる 蓮谷

田原又と帝と陣のう

母衣うけて一騎とあうれと川柳 古き

宇治合戦のう



秋におや宴と云ふ初め甲しー 蓬谷

宗盛奏起さるる

車よてたふんとてんらやわらうー山 干角

作新及自救の

葉のむやまのなる果の名もむじし 蓬谷

守盛醫王山(令と送る)

庭ーし親のひらり令報花 其養

小山草指の

関東のゆえーも家(さのころり) 沾洲

待賢門兵軍の

のーとよ皆付死の枯う那 陸珠

飛石のうらーとて我物うー

わらぬ呂の糖ーとらや梅のむじ 琴凡

新野信夏山(院最の)

うーと初れ蛇う少崎の田植膠 冬吹

同義ととあう

大根らや修長くの白於十二板 貞佐

牛ころ丸子人斬の

七刀にか糸し涼ー橋の月 支考

牛ころ奥洲下向の

友の扱と舌はく冠志はねうな キ角

赤江山角力



角ノトシノ並ノヤノ始ノ事アリ

鼠宮

新船ヤ—木隠道ノ事

代後ト見テもこのし—奇産紫

欠代

同七騎落ノ事

首いつ即ちあて渡川ノ事

石徳

実盛討死ノ事

勢—と流つて濁る桂ノ事

欠代

義仲托負ノ事

山吹もろくも出る田—

許六

言隠京時足陣とあつて

—より梶原道—郭—

吉水

一の谷いよそう敵ノ事

龍野の尾は流枯はう—もの友

石徳

忠度と六浦を組討ノ事

あれ組人あつてるは磯流

宗因

忠度一首の事

忠度と原よの事—火神ヶ

キ角

八幡合戦ノ事

川海さく陸よあつれはさう

石徳

平家舟よて月とあつて

具是く若くはの事—月尺舟

欠代

我流り流—







こゝのちと包じうはりまじく 琴風

京屋屋の観音の奇理あつた

柘枝や継ごころへの梅のむ 沼波

いさお友盛久家のみ

五月雨も長あはれ落るは 似去

義仲富樫の園と通る

圓 いさくらゆるすや 梨本守 キ角

弁更ふ節を此と譲る

強力のりふまことしう 是あまみ 壺月

弁更ふ衣川よて死する

いさ、立性せの十 扱うる 乙由

工友祐弥控柄のみ

うつてある高時舞の光る由 空位

和田酒ゆりの

名長業のあつたもさる一季の言 園女

若我兄身控場へ思ひ入る 氷花

万山もや控場く

に扱付のみ 瑠珠

名長り、鳥入るや

十番切のみ 去来

あつた地や不二の雪

あつた地や不二の雪のふけ不 キ角







長崎抄中言... 元初の事  
お禅入るる時威亡の事  
蓮谷

運舟てりいよあつる希い芥る  
同

正成寺母の息女へ事  
学れ親正成ハ山崎 柳

ふ子城守の事  
鴨の声 許六

足置屋城の事  
餅よりして着るり 芳の村雀 蓮谷

正成天王とて未来記と云く事

言ハ根の事いふ事なる  
貞代

横井者も楠父子別きの事

括るよめる事いふ事や楠の家  
くせ成

正行ハ父正成教訓の事

初  
よるハ言ハすの事  
蓮谷

正成漆川とて討死の事

餘花ありとも楠死してを平祀  
素堂

下氏恭平とていふと云題と

鞘あてとていふ事代り山さく  
貞代

新綿や治る代のら乃事  
晩山

けり代よあつる事いふ事  
陸琳



け所奇仙有異之

鑑凌のほり

雷風菴 蓮谷後序有

異之

抽の巻は流りなりきり序の巻

書林

市郎右衛門

延享五戊辰年二月廿九日

京都堀川通錦上町

西村市郎右衛門

書林

江戸本町三丁目

西村源六



明和五<sub>戊</sub>子年十月寫之也



多... 永年二月廿日



